第43回児童生徒読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校1年生の部　最優秀賞

君が、彼が、彼女が、私が

弟子屈中学校　金川　眞子さん

では、実際に痣を消してみましょう。」

「その結果、初鹿野さんの心を射止めることができれば、賭けはあなたの勝ちです。痣はあなたの顔から永久に姿を消します。逆に、初鹿野さんの気持ちに変化が起きなければ、賭けは私の勝ちです。」

私がこの本を買ったきっかけは、特には無かった。強いていえば時間だった。時間がなく、勢いで選んだ本がこれだったというだけだった。だが、ひとたび読むとこの本に魅了され虜になってしまった。理由は、作者の個性的な文体と、ファンタジックな題材である。リアルな文体・個性的な比喩とファンタジックで独創的な内容が混ざり、小説という概念をくつがえされたようで不思議なくらいおもしろかったからだ。

顔の右半分に生まれつきの大きな青黒い痣のある主人公『深町陽介』。彼がある日閑散とし色褪せた商店街を歩いていると、運命的なタイミングで公衆電話のベルが鳴った。

「一つ、提案があります。」

「諦め切れない恋が、あなたにあるはずです。違いますか?」

三カ月後、再び公衆電話のベルが鳴った。

「初鹿野唯さん。彼女のことを、あなたはまだ諦め切れずにいます。」

『この痣さえなければ、僕と初鹿野の関係はもう少し違ったものになっていたかもしれない。』

「では、実際に痣を消してみましょう。」

「さて、期限は…そうですね。五十日、あなたに与えましょう。あと数時間で日付が変わりますから、そこを賭けの始まりとすると、八月三十一日が期限ですね。それまでに、初鹿野さんと両想いになってください。」

こうして彼は期限までに、初鹿野に愛されるために様々な人の助言や協力をもらい行動を実行していった。

ここから私が最もすきな登場人物を紹介したいと思う。もちろん、主人公『深町陽介』やヒロイン『初鹿野唯』もすきだが、私は彼らのクラスメートの『荻上千草』がすきである。かたくらいまでの長さの黒髪に、主人公曰く感心してしまうくらいの整った容姿の持ち主である彼女へのすきは、大半が共感という気持ちからだった。容姿は似ても似つかない私だが、彼女の言葉にとても共感した。

「私は空っぽな人間だったんです。」

「それまで自分は親のいいなりに生きてきただけで、選択らしい選択は何一つしてこなかったのだと初めて自覚したこと。」

私も彼女と同じように、これまで人に流されてばかりで選択らしい選択はすべて他の人に任せていたことを改めて痛感させられた。

私は今年から吹奏楽部に入部した。自分では、これが人生で初めての自らの選択だと思っている。自分で選んで進んだ道だから、チャンスを棒に振らないように続けていきたい。次の目標は進路の選択を明確にすること。その前にもさまざまな場面で選択を求められることが増えると思うので、柔軟な思考を持ち人の役に立つような選択をしたい。

書名『君が電話をかけていた場所』
三秋　縋　著

（寸評）
読み終えたあと、思わず「この本を読んでみたい」という衝動に駆られてしまいました。実に見事な書き出しです。普段から読書をし、文章力を磨いていることが感じとれました。
また、主人公以外の人物にスポットを当て、自身の人生観を重ね合わせることで、今の自分、そしてこれからの自分の生き方を深く考察しています。
これからいくつも出てくるであろう人生の岐路を、熟慮し選択していってほしいと思います。

■中学校2年生の部　最優秀賞

文武両道を歩む

弟子屈中学校　土屋　光輝君

文武両道という言葉を中学生になってから多く耳にするようになった。僕は、文武両道を目ざすことによって、自分の夢に近づくことはできても、心のどこかでは、それを志して続けるのは難しいことなんだろうなと考えることはあった。

そんな自分に、文武両道で夢を成し遂げた江戸の天才数学者の関孝和を書いた『円周率の謎を追う』という本との出会いで、文武両道を頑張ってやってみようと思うようになった。さらにこの本は、青少年読書感想文全国コンクールの中学生の部の課題図書となっていて、さらっと目を通してみると面白かったので読むことにした。

関孝和は、数学がとても好きであり、その中でも円に興味を持っていた。今では、当たり前に使われている円周率の三・一四だが、江戸時代にはあまり使われていなかった。円の謎を解くために時間を忘れるぐらい数学を頑張っていた孝和であるが、円に夢中になってのめりこんでしまう。そのために数学よりも先に習っていた、儒学や剣術がおろそかになり、数学をやめさせられそうになった。僕は、サッカーを少年団で行っているが、サッカーの練習日程や練習時間におわれ、日々の時間がなくなり、そのため勉強がおろそかになってしまうことがある。だから、このような状況に僕は共感ができた。

その後の孝和は、儒学や剣術も力を入れて頑張り、数学も続けることができた。さらに円の謎を追うために大阪へ旅に出て、そこで沢口一之と出会う。一之は、孝和と同じ数学者であり、かつライバルという関係である。彼はずば抜けて優秀なのだが、答えを出すのを急ぎすぎる傾向があった。「なぜ、そうなるのか。」ということに関心があった孝和とは真逆の存在であった。僕は一之と同じ様に答えを解くことができたなら、なぜそうなるかなどをあまり考えることがなかった。孝和の様に、これからは、何かに夢中になる事があるみたいに少しずつ「どうしてこうなるんだろう。」と考えてみたいなと思うようになった。数学のレベルを高めていった孝和のもとに入門したいという兄弟が現れた。その兄弟とともに孝和は、円周率の謎に近づいていくことになった。円周率の謎解きに夢中になっているあまり、娘を亡くした孝和。後悔の気持ちの中、夢の中で娘の姿が現れたのと同時に、大きな円が現れる。さらに多くの数式、様々な計算方法が現れた。それが後に増約術とよばれ、現代の数学で有名な加速法のひとつ「エイトケン△二乗加速法」と同じものを二百年も前に発見していたのである。孝和は夢の中で計算方法が思い浮かぶほど、円周率のことを好きで、よく考えていた。自分だったら思いついたとしても、書きとめることはできずに忘れてしまっていたのではないかと思ってしまった。それは、まだ本当に好きな事をつきつめた事がないからだと思う。

孝和は、好きな事は夢中になって真剣に取り組み、やらなければならない武術などをしっかりとこなして、文武両道という道を歩んだ。自分も「好きこそ物の上手なれ」と言うように、長く続けているサッカーを改めて誰にも負けないくらい好きと思って努力をしたい。そして、将来のやりたいことにつなげるため、やらなければならない勉強をこなして、文武両道という言葉のもと、さらに学校生活を楽しんで頑張っていこうと改めて感じる一冊となった。

書名『円周率の謎を追う』
鳴海　風　作

（寸評）
「文武両道」を目指し実行することは容易なことではありませんね。この本の主人公のように幾多の試練を乗り越え、かつまた、愛娘を亡くしながら偉業を成し遂げたことは想像を絶します。

土屋君がこの人物から生き方を学び、それをこれからの自分の成長のための羅針盤にしようという強い信念が感じとれます。
サッカーと勉強の両立を目指してこれからの学校生活、そして人生を歩んで行ってほしいと思います。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※生徒の学年は、コンクールが行われた平成29年度当時のものです。